

タウィ川の流れるところ

(『若き日の芸術犬の肖像』から)

A Translation of "Where Tawe Flows" from Dylan Thomas's *Portrait of the Artist as a Young Dog*

坂本正雄 訳

translated by Sakamoto Masao

2007年10月3日受理

ハンフリーズ氏、ロバーツ氏、それから若いトマス氏はエムリン・エバンスさんの住まい「ラベングロー」の玄関を、夜九時きっかりに叩いた。三人はベロニカのしげみに隠れて待った。毛織り地のスリッパを履いた足を引きずって、エバンスさんの旦那が奥の部屋から出てきて、かんぬきをがたがたいわせた。

ハンフリーズ氏は教師で、背が高く、色白で、どもりがあった。小説を書いたが、売れなかった。

ロバーツ氏は中年で、元気がよかったが、評判が悪く、保険会社の集金人をしていた。同業者仲間では死体泥棒と呼ばれていた。友達の間では、ウェールズ版のバークアンドヘア〔注：19世紀前半、殺人を犯し、死体を医学解剖用に売っていたスコットランドの殺人鬼。Burkeは、Hareの不利な証言により、1829年処刑された。〕として知られていた。かつて醸造所では高い地位にいた。

若いトマス氏は当時、無職だったが、直ぐにロンドンに出て、チェルシーで雑誌か何かのフリーランサーの仕事をすると思われていた。一文もなく、漠然とヒモ生活を望んでいた。

エバンスさんの旦那がドアを開け、車入れの細い道を、懐中電灯で照らした。ガレージや鶏舎に光を当てたものの、ささやき声のするしげみには目もくれなかった。三人の友人たちは飛び出して、恐ろしい声で、「俺たちは人食い鬼だ。中に入れろ。」と叫んだ。

「扇動的な文学を模索しているんだ。」ハンフリーズ氏があいさつ代わりに手を挙げて、ようやく言った。

「ソーンダース・ルイス〔注：1893-1985。ウェールズ語詩人、民族主義者。〕、万歳。で、どこにあるか分かったんだよ。」と、ロバーツ氏が言った。

エバンスさんは懐中電灯を消した。「さあ、こっちにお入り。夜の風の中も何だから。何か一杯出すよ。パースニップのワインしかないがな。」エバンスさんの旦那が言った。

みんなは帽子とコートを脱ぎ、階段の手すりに積み重ねた。双子のジョージとセリアを起こさないよう、小声で話し、エバンスさんの旦那の後を、その巢穴へとついて行った。

「問題ともめごとの原因はどこにいるんだい、エバンス。」ロバーツ氏がロンドンなまりで言った。手を暖炉

の前に出して温めながら、毎週金曜日にここに来ているにもかかわらず、驚きを込めた目で、ほほえみを顔に浮かべ、部屋の中を見ていた。きちんと並んだ本、凝った飾りのついた、たたみ込み蓋付きの机(これのおかげで居間が書斎になっているというわけだ)、ぴかぴかの大時計、かたくなに小鳥を見ている子どもたちの写真、味のいい自家製のワイン(ビールの古瓶に入れて、相当な効果がある)、すり切れたぼろ布の上で寝ている猫。「ブルジョワのことはよく分かってるんだがな。」

ロバーツ氏はいわくつきの人物で、家がなく、独り者だった。借金がたくさんあった。友達といえば、その奥さんや生活のことを何にもましてうらやみ、さげすむように詳しく噂するのだった。

「台所だよ。」エバンスさんが、グラスを渡しながら言った。

「もう一つを除いて、女の唯一の居所だな。」ロバーツ氏が本気で言った。

ハンフリーズ氏とトマス氏は暖炉の前に椅子を持ってきた。四人の男たちは腰を下ろした。ひそひそ話に顔を寄せ、手にはなみなみとついだグラスを持っていた。しばらくは誰も口をきかなかった。みんな笑いを含んだ目で互いの顔を見ながら、ワインをすすり、ため息をつき、チェッカーゲームの箱からエバンスさんが取り出したたばこに火を付け、ハンフリーズ氏は一度大時計に目をやり、目配せをし、唇に指を当てた。それから客たちの身体が温まってきて、ワインがきき始め、外のひどい夜のことを忘れる頃になると、禁じられた楽しみにちょっと肩をすくめて見せ、エバンスさんが口を開いた。「家内はあと半時間もすれば、寝るよ。それから仕事を始めようや。自分のは持ってきただろう。」

「それから道具もな。」ロバーツ氏が、サイドポケットを叩いて、言った。

「それまで何の話をしよう。」若いトマス氏が言った。ハンフリーズ氏がもう一度目配せをして、「しっ。」と言った。

エバンスさんが言った。「子どもの頃、土曜日に来るのが待ち遠しかったが、同じくらい今夜が来るのが楽

しみだったよ。子どもの頃は一ペニーもらったんだ。みんな、口止めキャンデーと赤ん坊ゼリーに変わったがな。」

エバンスさんは、ゴムのおもちゃ、洗浄器、バスマットなど、ゴム製品の行商をしていた。ロバーツ氏は貧乏人の友達と呼んでいた。するとエバンスさんは真っ赤になるのだった。「違う、違う。サンプルを見て貰ったらいい。そんな物は何も無いんだ。」エバンスさんは社会主義者だった。

「俺は、小遣いで、シンデレラを買った。屠殺場で吸ったもんだ。」ロバーツ氏が言った。「一番うまいたばこだ。近頃は見かけないな。」

「例のジムを覚えているか、屠殺場の差配人だった。」エバンスさんが聞いた。

「あれは俺の後釜をねらってたんだ。お前さんたちみたいに、俺は若くないからね。」

「歳はとってないよ、ロバーツさん。G. B. S〔注：バーナード・ショーのこと〕を考えてごらん。」

「汚れなきショー大先生はごめんだよ。おれは鳥も獣も食べて、後悔なんかしないさ。」

「花も食べたことがあるかい。」

「おい、おい。文学青年ども、わけの分からないことをしゃべるなよ。俺は戸別訪問の死体泥棒さまだ。」

「ロバーツさんは腹の底まで手を突っ込んで、ビール一杯の値段に見合う物として、首根っこをへし折ったネズミを引っ張り出してくれるよ。」

「で、それはビールだったんだ。」

「やめ、やめ。」ハンフリーズ氏はグラスでテーブルを叩いた。「話を無駄にするんじゃないよ。なんでも必要なんだから。さっきの屠殺所のエピソードはきみの備忘録に入れたかい、トマス君。」

「覚えておきますよ。」

「忘れるなよ。でたらめにしゃべるだけなんだから。」ハンフリーズ氏が言った

「分かりましたよ、ロデリック。」トマス氏はすぐに返事した。

ロバーツ氏は両手を耳に当てた。「話がなんだか深淵になっていってるな。難しいことばを使ってごめんよ。エバンス、みやまがらす用ライフルみたいなのは持っているかな。教養をひけらかす奴らを追っ払ってやりたい。『無用の用』についてジョン・オー・ロンドン協会で講演したときのことを話したかな。難問だったよ。俺はずっと、ジャック・ロンドンのことをしゃべったんだ。すると今日話すと言ったこととは違うじゃないかとしまいに言い始めたもんだから、こうやってやったんだ。『そうだ、これこそ無用の講義なんだ。』ぐうの音もなかったね。デイヴィース博士の奥さんは最前列に座っていたが、覚えているかな。最初、W. J. ロックの講義をやって、途中をくりぬいたんだ。奥さんが、『浮浪罪で捕まったラバポンド』の話をしたのを

覚えているか、ハンフリーズくん。」

「やめ、やめ。それは後回しだ。」ハンフリーズ氏が言った。

「パースニップのワインを飲んでくれ。」

「エバンスさん、絹ののどごしだよ。」

「赤ん坊のミルクみたいだ。」

「いいときを言ってくれ、ロバーツさん。」

「期間を表す、四音節の単語。お、ありがとうございます。マッチ箱に書いてあるのを見たよ。」

「マッチ箱に連載物が載ってないかな。ダフネがつぎに何するか見るのに、店を買い上げてもいいだろう。」ハンフリーズ氏が言った。

ハンフリーズ氏は急に黙って、当惑気味に友人たちの顔を見た。ダフネというのは夫と別居してマンセルトンに住んでいる婦人のことだった。このおかげで、ロバーツ氏は醸造所の信用と地位を失ったのだ。その婦人の家に、いつもビールを運んでいた。ただでだ。カクテル用のキャビネットを買ってやった。それから百ポンドをやり、自分の母親の指輪をやった。お返しに、夫人は豪勢なパーティ何回も開き、ロバーツ氏は一回も呼ばれなかった。トマス氏だけがその名前に気づき、「いやいや、ハンフリーズ君、トイレットペーパーが一番いいよ。」と言っていた。

ロバーツ氏が言った。「ロンドンにいた頃、パーマーズ・グリーンに住んでいるアーミテッジという名前の夫婦のところをやっかいになっていた。カーテンとブラインドを作っていた。それで、互いにな、トイレットペーパーにメモを残しておくんだ。毎日毎日。」

「ベネチアブラインドを作りたいなら、帽子の留め針をそいつの目に突き刺すんだ。」エバンスさんが言った。エバンスさんは家にいると、いつも邪魔者扱いされているような気分になった。それで妻が怖い顔でキッチンからやってくるんじゃないかと待ちかまえていた。

「俺は『やあ、トム、ワトキンスがお茶に来るのを忘れないで。』とか『ベギィへ、トムからよろしくだど。』とかよく言わなくてはならなかったよ。アーミテッジの旦那はモズレー〔注：政治家、ネオファシストの指導者〕の信奉者だったんだ。」

「殺し屋だな。」ハンフリーズ氏が言った。

「本当に、この個々の融合のことはどうするつもりだい。」エバンスさんが聞いた。妻はまだ台所にいた。皿を叩くのが聞こえた。

「質問で答えよう。」手をエバンスさんの膝に置いて、ロバーツ氏が言った。「どのような個性が残っているのか。大衆時代は大衆集団を生み出す。機械はロボットを作る。」

「奴隷としてだ。いいかい、決してその主人としてではない。」ハンフリーズ氏が明言した。

「ほら、そこに。ほら、あそこだ。点火プラグによる

専制の支配というものだ、ハンフリーズ君。その血と肉とでいつも支払うのだ。」

「空のグラスは。」

ロバーツ氏はグラスをひっくり返した。「これは、昔、ラネリーでは『この部屋で一番強いやつと殴り合いをしよう。』という意味だったんだ。でも本当に、エバンスが言うように、昔ながらの個人主義者は今では丸い穴にはまった四角い木栓だな。」

「なんという穴だ。」トマス氏が言った。

「われらが、オンルッカーは先週なんと言ってたっけ、われらが国家の誤指導者だったっけ。」

「考えても見ろよ、ロバーツさん。もうすでにネズミが一杯だ。」エバンスさんが神経質そうな笑い声とともに言った。台所からは音は聞こえなかった。妻は準備ができたのだ。

「オンルッカーはバジル・ゴース・ウィリアムの筆名だよ。知ってましたか。」ハンフリーズ氏が言った。

「変名だろ。ラムゼイ・マックの論説を読んだか。『虎の威を借る狐』という題だ。」

「知ってるさ。胸くそ悪い。」ロバーツ氏が吐き捨てるように言った。

モード、つまりエバンスの奥さんが部屋に入ったとき、最後のことが耳に入ってきた。奥さんはやせた人で、身体全体で苦痛を表し、疲れた手、昔はきれいだったろうと思わせる茶色の目、上等な鼻をしていた。大晦日の晩、周りのことは頓着しない顔で、ロバーツ氏の痔核の話を一時間以上聞いていた。そしてロバーツ氏が痔核のことを怒りの葡萄と呼ぶのを口も挟まず、そのまま聞いていた。酒が入っていなければ、ロバーツ氏は「奥さま」と呼んで、天気や寒さの話をするのだった。ロバーツ氏は跳んで立ち上がり、自分の椅子を勧めた。

「いいですよ、ロバーツさん。」きれいな、固い声で奥さんは言った。「すぐに寝ますから。寒さがこたえますので。」

ブスのモード、早く寝ろ、若いトマス氏は思った。「奥さん、お休みになる前に、少しばかり暖まりませんか。」

奥さんは首を振って、うっすら、笑みを浮かべた。そして夫に、「寝る前に、部屋をちゃんとしてよ。」と言った。

「奥さん、お休み。」

「今夜は、零時を過ぎることはないよ、モード。約束する。サンボを裏に出しておくよ。」

「お休み、奥さま。」

ぐっすり寝やがれ、おすましブス。

「もうおじゃましませんことよ、殿方。クリスマス用のパースニップワインは靴箱に入ってるわ、エムリン。無駄にしないでね。お休み。」

エバンスさんは眉を上げ、口笛を吹いた。「ヒュー。」

顔をネクタイで扇ぐ仕草をして見せた。それから手がそのままじっと止まった。「あれは、大きな屋敷で育ったんだ、召使いのいる。」

ロバーツ氏はサイド・ポケットから鉛筆と万年筆を出した。「プライスレスの原稿はどこだい。万物を破壊する時の流れは、いま飛び去っていつているよ。」

ハンフリーズ氏とトマス氏は膝の上にノートを広げ、それぞれ鉛筆を持ち、エバンスさんが大時計の扉を開けるのを見ていた。振り子の下に、青い蝶結びでくくられた用紙がひと山あった。エバンスさんはこれを机の上に置いた。

ロバーツ氏が言った。「開会を宣言する。まずどこまで行っていたかを確認しよう。議事録は、トマス君。」

トマス氏が言った。「『タウィ川の流れるところ：田舎の生活の物語。第一章：ドックランド、スラム街、サバービアなどとの比較の描写』ここで終わってたんだ。決まっていた章のタイトルは、第一章『みんなの生活』。第二章が『ひとの生活』で、ハンフリーズさんが、こう提案したんだ。『共同制作者はそれぞれ自分の住んでいる町と階層からひとりの人物を選び、物語が始まる時点、つまり今年の冬までの生涯を簡単に読者に紹介する。これらの人物、つまり今後主要な登場人物となるわけだが、その紹介と年代記が第二章の内容となる。』何か質問は。」

ハンフリーズ氏は説明のすべてに同意した。氏の性格は進歩的意見を持った感受性豊かな教師だった。ひとには誤解され、ひどい扱いを受けていた。

「質問はないよ。」とエバンスさんが言った。氏はサバービア担当だった。そしてメモをしゃらしゃらいわせ、発言する機会を待っていた。

ロバーツ氏が言った。「俺はまだ何も書いていない。全部頭の中だ。」氏はスラム街を選んでいて。

トマス氏が言った。「ぼくとしてはホステスにしようか、売春婦にしようか決めかねているところだ。」

「売春もやっているホステスはどうだ。」ロバーツ氏が言った。「あるいは登場人物をふたりずつというのはどうだ。俺は長老議員がいいな。それから砂金掘り。」

「こういうものたちを誰が書き表したかな、ハンフリーズさん。」トマス氏が言った。

「ギリシャ人。」

ロバーツ氏はエバンスさんを肘で突き、ささやいた。「自分の担当の最初の文は考えているんだ。エムリン、聞いてくれよ。『廃屋の、ひとであふれる片隅に置かれたるふらふらのテーブル、ジンの瓶に灯された明滅の光の中に、割れたカップ、中には、げろ、つまりカスタードが一杯詰まったカップがあるのが、その土地に初めてやってきたものの目にはいる。』」

「テッド、まじめにやれよ。」エバンスさんが笑いながら言った。「それ書いたんだらう。」

「いや、ほんとうに、思いついただけなんだ。」ロバ

ーツ氏は指を鳴らした。「それにだれが俺のメモを読んだと言うんだ。」

「何か書いたかい、トマス君。」

「まだです、エバンスさん。」前の週、トマス氏は、女が亡くなる時に身体の上を飛び越し、吸血鬼に変えてしまう猫の話を書いていたのだった。そしてその女がじつは吸血鬼の子どもの家庭教師になるところまで進んでいた。でもその話をどのように小説の中に組み込むかが分からないのだった。

「幻想的な部分を避ける必要はないだろうね。」

「ちょっと待て、ちょっと待て。」ハンフリーズ氏が言った。「我々の方針はリアリズムだ。トマス君のやり方だと、登場人物が皆、子どもになってしまう。どこに進んでいくか分からない。一時にひとつの仕事だ。だれか登場人物の生涯を書いたものはいるか。」ハンフリーズ氏は自分が書いた生涯を手にとっていた。赤インクで書いたものだ。学識のあるもので、手際よく書かれ、小さくまとまっていた。

「わたしの書いた人物はもう舞台上に乗せてもいいくらいだ。ただ全部書ききっていないんだ。メモを見なくちゃ。そのほかは頭の中から取り出さなくては。本当につまらない話だよ。」

「うん、でも始めなくては。」ハンフリーズ氏が期待はずれの顔で言った。

「誰が書いた生涯でもつまらないさ。」ロバーツ氏が言った。「俺のは猫でも笑うぜ。」

ハンフリーズ氏が言った。「そこは反対するよ。神秘的な共通要素、町の間人はたまり水くらいにおもしろくないね、ロバーツさん。資本主義社会はひとを、中産階級の神のシンボルつまり山高帽のもとに、抑圧と無益な慣習の塊にってしまった。」ハンフリーズ氏は手のひらに書いたメモをちらと見て、目をそらした。「パンとバターを求めてのたゆまぬ労働、失業の亡霊、上品さを押しつける神々、結婚の床という空虚な戯れ言。」たばこの灰をカーペットに落として、ハンフリーズ氏は続けた。「結婚ねえ。合法的、一夫一婦の売春だ。」

「どう、どう。行っちゃったよ。」

「ハンフリーズ君はまた木馬にお乗りだ。」

エバンスさんが言った。「わたしにはこれほどの語彙力はないようだ。この未熟者に哀れみを。始めないうちから、わたしの話はおだぶつだよ。」

「凡人の生活はもっとも異常なものだと思うね。」ロバーツ氏が言った。「たとえばぼくのは…。」

「書記として、」とトマス氏が言った。「エバンスさんの話を採用することに一票。春の準備リストに載せるためにも、タウィ川の話を終わらせなくては。」

「わたしの『明日と明日』は夏の真っ盛りに出したよ。」

エバンスさんは咳払いをし、暖炉を見つめ、それから口を開いた。

「女の名前は、メアリーだ。でも本当の名前じゃない。わたしがそう呼ぶのは、女が実在の人物で、わたしたちふたりとも中傷を望んでいないからだ。女は『美わしの眺め』という家に住んでいるが、もちろんそれはその家の名前というわけではない。ハンフリーズ君、別荘に別の名前を。わたしがその女を登場人物として選んだのは、その人生がちょっとした悲劇であるのに、ちょっとしたおかしみの気味もあるからなんだ。ロシア的と言ってもいいだろう。メアリー、今はメアリー・モーガンで、結婚の前はメアリー・フィリップスだった。まあ、結婚は後の話で、尻すばみの結果だったが、もともと郊外に住んでいたんじゃないし、山高帽の影の下で生きていたわけでもなかった。君やわたしみたいにな。いや、わたしみたいにといいべきかな。わたしはポプラ街で生まれ、ラベングローで暮らしている。山高帽から山高帽へだ。言っておかねばならないが、ハンフリーズ君の酷評で思い出したんだが、それから、ハンフリーズ君の見方を支持するのはわたしが最初なんだが、日常の間人はブルームズベリーの神経症詩人たちと同じくらい興味をかき立てるものなのだ。」

「あんたと握手するのを忘れないようわたしに言ってください。」

「サンディ新聞を読んだんだろ。」ハンフリーズ氏がとがめて言った。

「問題の蒸し返しはまた後で。」トマス氏が言った。

「『凡人はネズミなのか。』だ。さてさて、メアリーはどうした。」

「メアリー・フィリップスだな。」エバンスさんが続けた。「…お並びの知識人からさらなるご異議があれば、ロバーツ氏にそのお考えの物語についてお話しただきませう。是非やっていたきたい。で、メアリー・フィリップスはカーマーゼン州の、どことははっきり言いますまい、大きな農場に暮らしていました。父親はやもめだった。必要なものは充分に持っていて、大酒飲みだったが、つねに紳士でもあったわけだ。さて、さて、階級闘争のことは忘れなさい。まだくすぶっているのが見えるじゃないか。父親は申し分のない家の出だったが、飲んべえで、問題はそこだった。」

ロバーツ氏が言った。「狩り、漁り、飲んだくれ。」

「いや、素封家ということではなく、新興の財産家でもなかった。わたしはユダヤ人反対派ではないが、フィリップス的ところはなかった。アインシュタインやフロイトを考えてもらったらい。キリスト教徒にも悪いやつはいる。その親父は今わたしが話しているとおりの人物、あんたがたがわたしにそうさせてくれさえすればいいのだが、財産となる農業から得る大量の蓄えを作る男で、今はそれを使っているわけだ。」

「負債整理もな。」

「子どもはひとりだった。それがメアリーだ。メアリ

ーはきちんとして、行儀の良い娘で、父親が酒のためにひどい状態になっているのを見るのは耐えられないことだった。毎晩親父が帰ってくるたび、いつもぐでぐでんだっただが、メアリーは自分の寝室に閉じこもって、家の中を父親が転げ回り、自分の名前を呼び、ときには食器を割る音を聞いていた。しかしまあほんのたまにだ。それに娘の髪を傷つけたりすることはなかった。メアリーはその頃十八歳で、見た目のきれいな娘だった。映画スターではなくて、ねえ、ロバーツ氏のタイプでもない。おそらくメアリーはエディプスコンプレックスを持っていたんだろうが、父親を嫌い、恥ずかしくも思っていたんだ。」

「俺のタイプというのは、エバンス。」

「分からない振りはよせ、ロバーツさん。エバンスさんが言っているのは、あんたが家に持ち帰って、切手の収集を見せるような女ということだ。」

トマス氏が言った。「静かにしたまえ。」

「いずれにいたまはは名言だな。」ロバーツ氏が言った。「トマスさん、君は、氣息音を落とすと、下層階級を擁護しているんだなと、おれたちが思うのではないかと心配しているんだ。」

「中傷は、なしだよ、ロバーツさん。」ハンフリーズ氏が言った。

「メアリー・フィリップスはある若者に恋をした。マーカス・デイビッドとしよう。」暖炉をじっと見つめてエバンスさんが続けた。友人たちの目を見ずに、暖炉の火に照らされた友人たちの影に向かってしゃべっていた。「それで、娘は父親に話したんだ。『お父様、マーカスとわたしは婚約したいと思っています。夕食に招きたいの。そのときはお酒を飲まないって約束してね。』

エバンスさんは続けた。「『いつだって俺は、しらふだ。』でもそう言ったときにも、しらふではなかった。で、しばらくして、父親は約束した。」

「『もし約束を破ったら、承知しないわ。』メアリーは父親に言った。」

「マーカスは別の地域の裕福な農夫の息子だった。言うなら、ヴァレンチノ(注：1895-1926。イタリア生まれ、米国の映画俳優)を羊飼いにした感じだ。娘は恋人を夕食に呼んだ。そして男はやってきた。目鼻立ちの非常に整った若者で、髪に油を塗っていた。使用人たちは外に出ていた。フィリップス氏はその朝、市場に出かけ、まだ戻っていなかった。娘が自分で玄関の戸を開けた。冬の夕べだった。」

「場面を思い浮かべるんだ。おすましで育ちの良い田舎娘、執着心が強く、恐怖心もある、公爵夫人のような自負心を持ち、乳搾り娘みたいに真っ赤になって恥じらう、その娘が恋人のためにドアを開ける。すると恋人が真っ黒な敷居に、立っているのが見える。男は恥ずかしがっている。ハンサムだ。これがメモに書いたことだ。」

「娘の未来は、その晩、ちょうど入り口にぶら下がるように宙ぶらりんだ。『お入りになって。』娘は請うた。ふたりはキスはしない。娘は恋人が腰を落として、自分の手に唇の跡を付けてくれるのを望んだ。娘は家の中を案内した。その日は特にきれいにし、磨き上げられていた。スワンジー焼き物が入っているガラスケースも見せた。肖像画の掛かった部屋はなかったが、ホールに置いてある母親の留め金、父親の写真、背が高く、若く、しらふだった、カワウソを捕るときのスーツを着ていた、それらを見せた。娘は家の中に置いてあるものを自慢げに見せてずっと歩いた。マーカスの父親は治安判事だった。メアリーは自分の生まれが、妻になるにふさわしいものであることを、若者に納得させようとしていた。娘は父親が戻ってくるのをびくびくして待っていた。」

「冷たい夕食のテーブルにふたりが着いたとき、娘は祈っていた。『ああ、神様。お父様が、恥ずかしくない姿で現れますように。』娘のことを俗物と呼びたければ呼びたまえ。でも田舎地主、あるいはそれに近いものたちの生活は、所有という古くさい象徴や呪物に縛られ、捧げられていたことを思い出してほしい。夕食の間、家系のことを娘は話し、夕食がお口に合うといいけど、と言った。夕食は暖かい方が良かった。でも歳を取って汚い使用人の顔を、娘は見て貰いたくはなかった。これまでずっとこの家にいたんだからという理由で、父親は替えようとしなかった。そういうところにこうした社会の保守主義が威勢をふるっているのが分かるだろう。話を端折ると(今話しているのは要点だけだから、トマス君)、ふたりが夕食を半分ほど終え、会話がより親密なものになって、娘が父親の存在をほとんど忘れかけた頃だった。玄関の戸がぱたんと開き、フィリップス氏が通路をよろめきながら、入ってきた。大まじめに酔っぱらって。ダイニングルームのドアは開けっ放しだったので、父親の姿は丸見えだった。父親が通路で身体を揺すり、太い声でぶつくさ言っている時、つぎつぎと変わるメアリーの気持ちを説明しようとは思わない。父親は身体の大きな男だった。言うのを忘れていたが、六フィートで百十キロあった。」

「『急いで、急いで。テーブルの下に。』娘はしきりと小さい声で言った。そしてマーカスの手を取り、ふたりはテーブルの下にしゃがみ込んだ。どんなにマーカスがうろたえたか、わたしたちには分からない。」

「フィリップス氏が入ってきた。誰の姿も見えず、氏はテーブルにつき、夕食を全部平らげた。ふたり分の皿をきれいに舐め取った。テーブルの下でふたりには、父親が神をののしり、酒をがぶがぶ飲んでいるのが聞こえた。マーカスがそわそわするたび、メアリーは『シーツ』と、言った。」

「食べるものがなくなってしまうと、フィリップス氏

は部屋からふらふらと出て行った。父親の足が見えた。テーブルの下のメアリーが身震いするようなことば、三音節のことばを吐きながら、それからどうにか二階に上がっていった。」

「三つの推測が成り立つな。」ロバーツ氏が言った。

「それから娘には父親が自分の寝室に入ったのが聞こえた。娘とマーカスは隠れ場所からはい出して、空になった皿を前に座った。

「『どんなに言い訳していか分からないわ、デイビッドさん。』娘は言って、泣きそうになった。

「『たいしたことじゃないよ。』若者は言った。若者は誰に言わせても、従順な男だった。『お父さんは、カーマーゼンの市場に行ってきただけなんだ。ぼく自身はティーティは好きじゃないけど。』

「『酒を飲むと男の人は手の付けられない獣になるわ。』娘は言った。

「若者は娘に、何も心配することはない、自分は気にしていないと言った。娘は果物を勧めた。

「『家族のこと、どんな風にお思いになるかしら、デイビッドさん。あんな父を見たのは初めてだわ。』

「このちょっとした冒険で、ふたりの距離は縮まった。それからまもなく、ふたりは互いにほほえみ合い、娘の傷ついた自尊心もほとんど癒えかけたときだ。突然フィリップス氏が寝室のドアを開け、階下へ突進してきた。百十キロの巨体が家を震わせた。

「『帰って、父が入ってこないうちに帰って。』娘はそとマーカスに言った。

「余裕はなかった。フィリップス氏は通路に素っ裸で、立っていた。

「娘はまたテーブルの下にマーカスを引っ張りこみ、それから父親の姿を見ないよう自分の目を覆った。父親が傘を探して、ホールスタンドをがたがたいわせているのが聞こえてきた。それから父が何をしようとしているのかが分かった。自然の欲求に従って、外に出て行こうとしているのだ。『ああ、神様。』娘は祈った。

「『早く傘を見つけて、外に連れ出してください。通路からどけてください。』傘を探してわめく声がふたりに聞こえてきた。目から手を離すと、父親が玄関の戸を引きはがそうとしているのが見えた。ちょうつがいから引きはがした戸を頭上に抱え、闇の中に放り投げた。

「『急いで、お願い、急いで。今日は帰ってください。デイビッドさん。』娘は若者をテーブルの下から追い出した。

「『お願い、お願い。今日は帰って。もう会えないわ。恥ずかしい。帰ってください。』娘は泣き出した。若者は家から走り出した。それから娘は一晩中テーブルの下にいた。」

「それで終わりかい。」ロバーツ氏が言った。「非常に感動的な話だな、エムリン。どうやって手に入れた。」

「全体はどんな風になるの。」ハンフリーズ氏が言っ

た。「メアリーが『美わしの眺め』にどうして住むようになったか、今の話だと分からないじゃないか。メアリーはまだカーマーゼン州のテーブルの下だぜ。」

「マーカスというのは侮蔑すべき輩だと思う。」トマス氏が言った。「わたしならそんな風に女の元を離れたりはしない。ハンフリーズさんはどうですか。」

「テーブルの下というもね。気に入ったところだな。そこがものを見る位置だ。ものを見方を変えてくれる。」ロバーツ氏が言った。「その当時はな。偏狭なピューリタニズムというのは効力のなくなった勢力だ。ここの奥さんがテーブルの下にいるのを想像してみろよ。で、その後はどうなったんだ。娘は、足でもこむら返りになって、死んだか。」

エバンスさんは暖炉から振り返り、ロバーツ氏を叱責した。「好きなだけ減らず口をたたくんだな。だが、こうした出来事がメアリーみたいに自尊心のある、感受性の強い娘には影響が長く続くという事実は残るんだ。わたしは、娘の感受性を擁護しているんじゃない。そうした自尊心の土台はもう流行遅れだ。社会機構というのはな、ロバーツさん、箱ではないんだよ。わたしは、実際に起きた出来事を君に話しているんだ。社会的な意味での含みというのは関心外だよ。」

「エバンス、出しゃばったことをわたしはたしなめられているんだな。」

「メアリーはそれからどうなったんです。」

「エバンスを怒らせるなよ。」

エバンスさんはパースニップワインを取りに出て行った。戻ってくると、ことばを続けた。

「つぎにどうなったかって。おお、もちろん、メアリーは父親の元を離れたんだ。絶対許さないと。そして実際そうだったんだ。それでカーディガン州の叔父の所に、なんでもエミル・ロイドとかいう医師だ、やっかいになった。治安判事でもあった。贅沢に暮らしていた。七十五くらいだ。あの、年齢は覚えておいてくれよ。大きな診療所があって、友人に有力者がいる。年齢のいった友人のひとりがロンドンの服地屋のジョン・ウィリアム・ヒューズだ。本当の名前ではないんだが。で、このヒューズはロイドの家の近くに、屋敷を持っていた。この偉大なキャラドック・エバンスの言うことを覚えておいてくれよ。カーディガンのものたちはロンドンの奴らをペテンにかけ、大金を手にとると、ウェールズに戻ってきて余生を過ごすんだ。

「そうして、ひとり息子のヘンリー・ウィリアム・ヒューズ、これはきちんと教育を受けた若者だが、これがメアリーを見たとき、恋をしてしまった。そして娘の方もマーカスやテーブルの下の面目ない出来事を忘れ、ヒューズを好きになった。話し始めてすぐに、がっかりした顔をしないでくれ。これは恋愛物語ではないんだ。でもふたりは結婚することに決めた。ジョン・ウィリアム・ヒューズはメアリーの叔父が土地で

も大変尊敬のできる人物のひとりでもあり、父親の方も財産を持っているし、父親が死んだらメアリーのものになり、父親も今じゃちゃんとまじめに暮らしているので、同意したんだ。

「ふたりはロンドンで地味な結婚をする予定で、いろいろ手はずを整えた。フィリップス氏は招待されなかった。メアリーは嫁入り支度を整えた。ロイド医師が花嫁を引き渡す役を引き受けた。ヒューズ家のベアトリスとベッティが花嫁に付き添うことになった。ベアトリスとベッティと一緒にメアリーはロンドンに向かい、いとこの家に泊まった。そしてヘンリー・ウィリアム・ヒューズは親父の店の二階にあるアパートに泊まった。そして結婚式の前日、ロイド医師が田舎からやってきた。メアリーとはお茶を、ジョン・ウィリアム・ヒューズとは食事を一緒に取った。誰が支払いをしたのかなとは思っているんだ。それからロイド医師はホテルへと引き上げた。こうして細々したことを話しているのは、あらゆることがきちんと整い、またありふれたことだということを知ってもらったためだ。こうして無事に役者たちはロンドンにそろったのだ。

「翌日、式の直前、メアリーといとこ、名前とその気性は説明しなくていいだろう、それからそのふたりの姉妹は、こっちはふたりともブスで三十だ、ロイド医師が呼び出してくれるのをじっと待っていた。時間が経って、メアリーは泣いていた。姉妹はぶすっとしていた。いとこはいろいろとひとを呼び止めて、尋ねてばかりいた。でも医師は現れなかった。いとこは医師が泊まっているホテルに電話した。告げられたのは、前の晩には戻らなかったということだった。はい、ロイド様が結婚式にお出になることは存じ上げておりますと、ホテルのフロントは話した。いいえ、ベッドに横になられたご様子はありません。フロントは、もしかすると教会でお待ちになっているのではないのでしょうか、と言った。

「タクシーはメーターを上げながら、走っていった。ベアトリスとベッティはメーターを心配していた。そしてとうとう、姉妹、いとこ、そしてメアリーは教会にたどり着いた。群衆が外に集まっていた。いとこはタクシーの窓から顔を突き出し、警官に教会管理者を呼んでくれるように頼んだ。教会管理者はロイド医師はいないと言った。花婿と付き添い役が待っていた。そのとき、メアリーの心情はいかばかりだったろう。教会のドアが開いて群衆が騒ぎ、警官がメアリーの父親を引っ立てて出てきたのだ。フィリップス氏のポケットは酒瓶が一杯だった。父親がどのようにしてまず教会の中に入り込んだのか、それは誰にも分からない。」

ロバーツ氏が言った。「それがとどのつまりかい。」

「ベアトリスとベッティはメアリーに言った。『泣かないで、メアリー。お父様は連れて行かれたけど。ほ

ら、溝に落ちたわ。水しぶきが上がっている。興奮しないでね。すぐに終わるわよ。じきにあなたはヘンリー・ウィリアム・ヒューズ夫人よ。』姉妹は精一杯のことをことばにした。

「『ロイド医師がいなけりゃ、結婚はできないわ。』いとは言って、涙を拭いた。誰でもが泣いていたろう。そのときもうひとりの警官が…。」

「もうひとりだって。」ロバーツ氏が言った。

「…人混みをかき分け、教会のドアの所まで歩いて行った。そして中に用向きを伝えた。ジョン・ウィリアム・ヒューズとヘンリー・ウィリアム・ヒューズ、それから付き添い役が出てきた。みんなは、腕を振り、メアリーと付き添い役の姉妹、それからいとこの乗ったタクシーを指さして、警官にしゃべりかけていた。

「ジョン・ウィリアム・ヒューズが小径を駆け下り、タクシーの方にやってきた。そして窓越しに叫んだ。『ロイド医師が亡くなった。式は取りやめだ。』

「ヘンリー・ウィリアム・ヒューズが続いてやってきて、タクシーのドアを開け、言った。『メアリー、家に帰ってるんだ。ぼくたちは警察署に行かなくてはならない。』

「『それから死体安置所もな。』ヘンリーの父が言った。

「それでタクシーはまだ花嫁になっていない娘を家まで送っていった。姉妹は道中、娘よりもひどく泣いていた。」

「それが悲しい結末だ。」ロバーツ氏が、感謝の念を込め、言った。それからもう一杯ワインをついだ。

「本当はおしまいじゃないんだ。」エバンスさんが言った。「というのは、結婚式は中止になったばかりではなく、行われることがなかったんだ。」

「でも、どうしてだい。」ハンフリーズ氏が尋ねた。氏はフィリップス氏が排水溝に落ちたときも、まじめな面持ちで話の筋を追いかけていたのだ。「どうして、医者が死んだからといって、全部が取りやめになるんだ。引き渡し役を他の誰かにやらしてもらえばいいだろう。わたしなら自分が引き受けるよ。」

「医者之死ではないんだ。どこでどのように死んだかが問題なんだ。」エバンスさんが言った。賃貸の寝室貸間、ある女の腕の中で、死んでいたんだ。女はその町のある女なんだがね。」

「キスしてくれよ。」ロバーツ氏が言った。「七十五歳。あんたが歳を覚えておくように言ってくれて、うれしいよ、エバンスさん。」

「でもどうしてメアリーが『美わしの眺め』に住むようになったんですか。まだ聞いてませんよ。」トマス氏が言った。

「ウィリアム・ヒューズ家はそうした状況で死んだ男の姪を嫁には…」

「男としての資質がどれだけ立派でもかい。」ハンフ

リーズ氏がどもりながら言った。

「…したくなかったんだ。それでメアリーは戻って、父親と暮らした。父親はすぐに改心した。メアリーは当時、かんしゃくをおこしていた。ある日のこと、穀物と豚のえさをあつかう行商人に出逢い、当てつけで結婚した。そうしてふたりは『美わしの眺め』に住むようになった。フィリップス氏が死んだとき、例の教会に金を遺した。それでメアリーの手には何も入らなかったということだ。」

「夫にもな。なにを扱っていると言ったっけ。」ロバーツ氏が言った。

「穀物と豚のえさだ。」

その後、ハンフリーズ氏は自分が書いた物語を読んだ。それは長く、悲しく、詳細で、きれいな散文だった。それからロバーツ氏はスラム街の話をした。本の中には入れられないということになった。

それからエバンスさんは腕時計を見た。「もう零時だ。モードに零時までと約束をした。猫はどこに行った。外に出してやらなくては。クッションを破るんだよ。ぼくが気にしているわけではないんだけど。サン

ボ、サンボ。」

「あそこだよ。エバンスさん。テーブルの下。」

「ああ、メアリーみたいだ。」ロバーツ氏が言った。

ハンフリーズ氏、ロバーツ氏、それから若いトマス氏は階段の手すりから、自分の帽子とコートを手を取った。

「何時か分かっているの、エムリン。」エバンスの奥さんが二階から声をかけた。

ロバーツ氏がドアを開け、急いで外に出た。

「すぐ行くよ、モード。お休みを言っているところだ。ではお休み。」エバンスさんが大きな声で言った。

「来週の金曜日、九時きっかりだ。」小さい声で言った。「自分の物語を磨いておくよ。来週は第二章を仕上げよう。そして第三章に移ろう。お休み、みんな。」

「エムリン、エムリン。」エバンスの奥さんが呼んだ。

「お休み、メアリー。」閉まったドアに向かって、ロバーツ氏が言った。

三人の友人たちは車入れの道を歩いて、家を後にした。